

甲骨學の工具書使用案内——甲骨學論著引用卜辭をめぐって——

末 次 信 行

一、はじめに

筆者は、本研究『漢字學研究』第一號に「殷代武丁期卜辭にみえる『帝』と『下上』」というテーマの論文を掲載した。これは、「帝」と「下上」をふくむ卜辭史料を、従来の卜辭の扱い方から一步を踏み出し、甲骨片の材質の違いや出土坑（地點）からの視點を導入して、自説を披瀝したものである。自説を提出したからには、學界に寄與するといふ觀點から、當然、痛烈であれ發展的であれ、厳しい批判なり、評價なりが期待され、望まれもする。とりわけ、テーマに關連する分野の研究者からの評價は、自説を補強もしくは修正するうえで、大層有り難い¹⁾。

このテーマでは、思想・哲學・歴史などの關連分野からの批判が歡迎されるが、これを期待できないのが、現状である。

甲骨學が中國の古代思想・歴史にふくまれるか²⁾、もしくは近接するにもかかわらず、異質の世界というか、とりつくシマもないという風に考えられやすい。いわば「批判・評價」する手段がないと思われているのであろう。ただ、同分野を研究する者に對してさえ、方向性

の相違などで、批判らしい批判、評價らしい評價をすること、あるいは期待することは、現實にはむずかしい。

甲骨文・金文は特殊な文字をあつかわねばならないところから、獨善的になりやすいという問題もあろうが、つまるところ、研究者が少ないところに起因する。そして、研究者が少ない分には、「勞多くして、功少なし」との風評もさることながら、學習方法が確立していないという点でもある。適切なテキストを選ぶこともできず³⁾、第一に指導者がほとんどいないのであるから、研究者が増えるはずもない。

このような現状であるから、日本の甲骨學界は、低調といわざるをえない。かつて、「日本甲骨學會」が設立され、機關誌が發行されてきたころとは比較にならないであらう⁴⁾。

こうした現状を今すぐ打開することは困難であらうが、將來にむけて、甲骨學の現在のレベルを情報発信しておくことは、無意味ではなからう。

そこで、以下に筆者の論文を組上にのせ、批判・評價に際して、良心的な研究者なら取るべきはずの手順を、工具書を紹介するとともに、使用法を伝えたい。

二、工具書などについて

本題に入る前に「工具書」とはどのような書物を指し、また初步的に用いる工具書について簡単にふれておきたい。

「工具」というと、「工作に使う道具」というのが本来の意味である。

この「道具」が「手段」の意味に轉じて、「工具書」とは事典・字典・辭典・索引・年鑑や参考書類をいうようになったらしい。目的を遂げるための手段を指して工具というわけで、便利なことばである。『現代漢語詞典』（商務印書館、一九七三年）の「工具書」の項には「專爲讀者查考字義、詞義、字句出處和各種事實而編纂的書籍」と説明し、例として「字典、詞典、索引、歷史年表、年鑑、百科全書等」を掲げる。

さて、ここで甲骨學上のテーマについて、初步的な工具書を使ってみたい。前號小論の重要語彙は「帝」と「下上」であったから、まずこの言葉について調べてみたい。

まず、「字」あるいは「詞」、術語すなわち卜辭に見られる「いいまわし」、著録書名、研究者名などの項目を調べたいときには、孟世凱の『甲骨學辭典』（上海人民出版社、二〇〇九年。一九八七年出版の『甲骨學小詞典』の修訂版）がふさわしいであろう。

孟世凱は、一九三五年生まれ。四川省出身。四川大學歴史系で徐中舒教授に師事し、先秦史を學んでいるので、王國維の孫弟子ということになる。卒業後から、中國科學院（現在・中國社會科學院）歴史研究所で先秦史や甲骨文研究に従事している。『甲骨文合集』（後出）編纂など多数の編纂書があり、發表論文など一七〇篇におよぶ。

『甲骨學辭典』が収める項目は、三一八二條にのぼる。内容は殷墟出土の甲骨文とこの関連項目が主であり、周原出土の甲骨文もふくむ。ただし、掲載された項目・用語などは、二〇〇一年までに出版された著書などに限る。正文（本文）は筆畫數の順に語彙が排列されている。正文の前に「筆畫詞目表」があり、まず、これを使って目的とする單語の有無とページ數を確認する。

たとえば、「帝」を求める場合、帝字の畫數である九畫のところを開き、起筆順で搜すと四一九頁とある。ついで本文の四一九頁（圖一）を捲ると、親字の「帝」がトップにあり、つぎに甲骨文字が四例ならば。「帝」には三つの意味として三項目を掲げる。一は「天帝、天神」、二は「商先王尊號」、三は「祭名」とする。

「天帝、天神」の項目が小論のテーマに近い。この項目の解説中では、「卜辭中所見主宰風雷雨奠（旱）和人間禍」とし、卜辭にみえる「帝」の權能について述べ、このあと卜辭例を掲げている。

「帝」のつきには、「帝」をふくむ用語として以下の項目を順に立てる。
 「帝乙」「帝丁」「帝云」「帝五玉臣」「帝五臣」「帝甲」「帝史」「帝史風」「帝臣」「帝作禍」「帝辛」「帝其命風」「帝其命雷」「帝其終茲邑」「帝若」「帝虎」「帝命雨」「帝受我佑」「帝佚茲邑」「帝降奠」「帝降黑」「帝降鉞」「帝若年」「帝秋」「帝風」「帝鳥」「帝錫」「帝肇王疾」などの項目ごとに、その意味と卜辭例を掲げる。

どうように、「下上」を引くと、本文の六〇頁（圖一）にみえ、ついで「下上弗若」「下上若」の項目がならぶ。

この『甲骨學辭典』は、こうした重要語彙に對する木目きもくの細やかさ

が、特色となっている。

また、つぎの十表が、附録とされ、甲骨學の基礎知識の一部を提供する。

一、「商代世系對照表」(史記・股本紀の系圖と卜辭から歸納できる系圖を比較した表)

二、「甲骨卜辭中父母兄子稱謂表」(「稱謂」とは、ここでは親族の關係を示す名稱のことである。王妣在位者と未在位者に對する名稱で、父某・母某・兄某・子某と卜辭にみえ、これが卜辭の時代區分の指標の一つとされる。武丁・祖甲・康丁・武乙・文丁・帝乙・帝辛のそれぞれ世代ごとに「稱謂」が記された表)

三、「各家所定甲骨卜辭貞人時期表」(一四二例の貞人が、五期區分のどの時期に屬するかを示す表で、各家すなわち董作賓・島邦男・陳夢家・貝塚茂樹・饒宗頤・郭沫若の各説を上す)

四、「殷墟卜辭所見先妣表」(先公である示壬の妣から、先王である文武丁の妣まで三〇〇例の表)

五、「甲骨刻辭中所見諸子表」(子某の一二五例の表)

六、「殷墟甲骨文所見諸婦表」(婦某の一一九例の表)

七、「甲骨文干支表」(十干十二支の甲骨文字について、第一期と第五期の原形例を併記し比較する表)

八、「甲骨學大事年表」(一八九八年以前から二〇〇一年までの主要な出來事について、出版情報を中心にとめた年表)

九、「殷墟甲骨文著録書簡表」(甲骨片を著録する書名、編者、拓本か模本か寫真かなどの類別、綫裝・平裝・簡裝・精裝など裝丁の別と

冊數もしくは逐次刊行物名、所收甲骨片數、略稱、出版年月などを記した表)

十、「甲骨文合集」圖版檢索表」(『甲骨文合集』の分類總目で、圖版の冊數・頁數・甲骨拓片番號が、時代區分ごと、分類ごとに檢索できるための表)

以上が『甲骨學辭典』の紹介である。座右の一冊といえる。

つぎに、甲骨文字の一字の意味について調べたい場合についてである。

この場合には、徐中舒主編『甲骨文字典』(四川辭書出版社、一九八八年)がふさわしいであろう。

『甲骨文字典』は、『甲骨文編』(孫海波編著、哈佛燕京學社、一九三四年。中國科學院考古研究所編輯增訂本、中華書局、一九六五年)と『甲骨文字集釋』(一九六五年、後出)の長所をとり、コンパクトにしたものとされ、殷代から周初の龜甲獸骨文字を收録し、甲骨刻辭中、「不同形態符號の文字」は四〇〇〇字超、うち一〇〇〇〇字超が後世の文字と關連づけ辨識確定可能、残りの三分の二は地名か人名と推定されるとする(「序言」)。本文を利用するために「目錄」と「檢字」がある。

「目錄」は、上から篆字、現行の楷書、甲骨文字例、ページ數の順にならぶ。文字の順は『說文』の排列順になっている。『說文』の文字から外れるものについては、偏旁を考えて適切であろう部首の後尾に付されている。

「檢字」は、現行の楷書字の畫數から、この字典を引くことができる。楷書字は總畫數の順にならぶ。たとえを「帝」にとり、九畫を檢索す

ると七頁とある。ついで本文の七頁(圖 II i)を捲ると、黒枠の上に親字として「帝」の篆字が掲げられている。黒枠内に甲骨文字の字形、時代区分、出典・出所、「解字」、「釋義」が記される。

甲骨文字の字形には「帝」の三例が掲げられ、各文字ごとの下に「時代区分、出典・出所」がみえる。

「時代区分」は、「二期」「三期」「周甲」とあるのがそれである。「一期」が第一期(武丁の時代)、「三期」が第三期(廩辛・康丁の時代)を指し、殷墟時代を五期に時代区分するのに準じる。なお、時代区分に異説のある「自組・子組・午組卜辭等」は第一期に包括され、「歴組卜辭」は第四期に包括されるとする。「歴組卜辭」は『甲骨文集』の時代区分に従うことである。「周甲」は周原出土甲骨のことである。

「出典・出所」は、「時代区分」の下の「乙六四〇六」「甲一一六四」「川大一一・一二二」とあるのがそれである。「乙」「甲」「川大」が著録書の略號で、付載の「甲骨著録書目」を引くと、正式の書名がみえる。たとえば「乙六四〇六」は、『小屯・殷虛文字乙編』の拓片番號六四〇六となる。

「解字」は、字形の解説、文字の成り立ちなどから、意味を記す。「帝」の「解字」には「象架木或東木燔以祭天之形」とあり、「帝」の字形は、組んだ薪を燃やし天を祭るのにかたどり、「禘」の原初形と解説する(圖 II i)。

「釋義」は、「解字」を受け、意味をさらに詳説し、卜辭例(模釋と釋文)を示す。「釋義」には、「帝」の意味として「上帝」と「殷の先

王の稱號」に分けて、それぞれの卜辭例を掲げる(圖 II i)。

なお、「禘」については、別に項目を立てる(圖 II ii)。意味用法の相違で兩字とするが、甲骨文字としては、字形に共通するものもふくむ。

また、「下上」についての解説は、「上」(五〜六頁)の項の「釋義」の三にみえる(圖 II i)。

以上、『甲骨文字典』を簡略に紹介した。

兩工具書は、「取っかかり」のための辭典なり字典であるから、實際に使用を重ねると、不都合な箇所が気がついたり、問題點も多々生じるにちがいない。とくに字典の方は、『説文』の文字排列で甲骨文字をまとめようとするのには限界がある。のちに取りあげるが、甲骨文字の構成要素、いわゆる「偏旁」が、新たに部首として再編されたものの方が、より適切であろうが、これには習熟を要する。とりあえずは『説文』に準じるのが順當というわけである。

三、引用卜辭と工具書

甲骨學關係論者は、當然のことながら、甲骨卜辭を論據とする。したがって、これらを批判・検討する場合、論據とされている卜辭に、引き間違いあるいは読み間違いがないか、また、甲骨文字の模本もしくは釋文に問題がないか、これらを確認する必要がある。いいかえると、卜辭の刻まれた甲骨片の拓本もしくは寫眞、すなわち現物にもっとも近い姿のものを求め正確で間違いのない史料であることを確認するのが、面倒ではあるが、基本的手順というべきものである。まずは

基礎作業として、論文に引用された「原典」に当たり、誤りのないことを確認することが求められよう。

そこで、本誌前號掲載の小論第二節(三〇)～(三六頁)に引用した卜辭を例に、用語解説と工具書につき案内したい。

筆者が卜辭を引用する場合、

01 「貞方弋 2417 正(征) 佳帝令作我囡 2240(禍) 三月(英國一三三正 金四九六)」

05 「甲辰卜 爭 1045 貞、我伐馬 1630 方、帝 1132 受我又。一月(合集六六四 正 丙一一四)」

21 「吉吉 □ 「下」 上弗 「若」 (人文六九二)」

43 「乙亥卜、般 2864 貞、王 伐吉 0738 方、下上若 正(合集六二二正 + 合補二一九)」

という形で取りあげている。

卜辭冒頭の「01」「05」「21」「43」は、小論に用いた卜辭番號である。「01」から「80」ある、すなわち小論では全體で八〇條の卜辭を引用している。重複はない。類似の卜辭が多く混亂を避けるため、甲骨學関連論文では、このような形をとることがおおい。

卜辭番號のつぎに卜辭の具體例があり、末尾の() 内には卜辭の出所、すなわち著録名と甲骨片番號が記されている。

良心的批判者としては、まず卜辭史料を確認すべきであろう。文献史料をあつかった論文に例えると、「原典」とその引用箇所を誤りはないか、このことを確認するという基本作業に當たる。

そこで、以下に、甲骨版の拓本などの著録と卜辭の模本・釋文など

について解説したい。前號小論に引用した卜辭を例として著録を示す。要するに、引用卜辭の典據・出典についての話である。

引用卜辭の著録名は、前號小論では、

01 卜辭は、「英國一三三正 金四九六」

05 卜辭は、「合集六六四正 丙一一四」

21 卜辭は、「人文六九二」

43 卜辭は、「合集六二二正 + 合補二一九」

という略稱の形で記す。「英國」「金」「合集」「丙」「人文」「合補」は、それぞれ前號小論末尾に正式名を記している。ここでは、これら四例について説明しておく。便宜上、05 卜辭を A とし、ついで 01 卜辭 (B)、21 卜辭 (C)、43 卜辭 (D) の順序で述べたい。

A、05 卜辭の「合集六六四正 丙一一四」について

この A の形は、「合集六六四正」と「丙一一四」のいずれもが、この卜辭の典據と甲骨拓片番號を示す。

「合集六六四正」の「合集」が、『甲骨文合集』(略稱は『合集』とする)という著録名すなわち出典で、「六六四正」が、この拓片番號を指す。「正」は正反(表裏)の正(表面)の拓本という意味である。この典據と拓片番號から、この卜辭をふくむ拓片に當たることができる。

「丙一一四」は『小屯・殷虛文字丙編』(略稱は『丙編』とする)が著録名すなわち出典で、「一一四」が、この拓片番號を指す。「合集六六四正」の元となった拓本、すなわちオリジナルである(圖 III i)。

両者は同じ龜甲版の拓片ということになるが、當然、「元となった拓本」の方が、原拓に近い。さらに、『丙編』には釋文ならびに考證があり大變懇切にできている(圖III ii)。

「05」の卜辭例にみえるように、卜辭の出所については、『合集』と『丙編』というように、『合集』以前に出版されたオリジナルの著書名を併記している。この形の併記は、前號小論では、八〇條のうち、七一條をかぞえる。

『甲骨文合集』については、後でも取りあげるが、卜辭史料バンクとして最大の著録である。

『合集』の模本と釋文は、『殷墟甲骨刻辭摹釋總集』全二冊(中華書局、一九八八年。略稱は『摸釋總集』とする)ならびに『甲骨文合集釋文』全四冊(中國社會科學出版社、一九九九年。略稱は『合集釋文』とする)がある。いずれも『合集』の拓片番號順に模本や釋文がならぶ。

『合集』は郭沫若主編、中國社會科學院歷史研究所編輯、一九七八年から一九八三年に中華書局から出版された。全一三冊で、それまで出版された著録にみられる甲骨版の拓本や模本のほとんどが收められている。集大成であり、甲骨學界に寄與する、畫期的な史料集といえる。

前號小論で、『合集』に併記し引用したものには、

『鐵雲藏龜』(劉鶚、一九〇三年)

『殷虛書契前編』(羅振玉、一九一二年)

『殷虛書契後編』(羅振玉、一九一六年)

『戩壽堂所藏殷虛文字』(王國維、一九一七年)

『龜甲獸骨文字』(林泰輔、一九二一年)

『簠室殷契徵文』(王襄、一九二五年)

『殷契佚存』(商承祚、一九三三年)

『殷虛書契續編』(羅振玉、一九三三年)

『庫方二氏藏甲骨卜辭』(方法斂、一九三五年)

『柏根氏舊藏甲骨文字』(明義士、一九三五年)

『殷契粹編』(郭沫若、一九三七年)

『金璋所藏甲骨卜辭』(方法斂、一九三九年)

『小屯・殷虛文字甲編』(董作賓、一九四八年、考古學的發掘甲骨片を收める)

『小屯・殷虛文字乙編』(董作賓、一九四九年、考古學的發掘甲骨片を收める)

『殷契摭佚續編』(李亞農、一九五〇年)

『殷契拾掇第二編』(郭若愚、一九五三年)

『甲骨續存』(胡厚宣、一九五五年)

『小屯・殷虛文字丙編』(張秉權、一九五七〜七二年、考古學的發掘甲骨片を收める)

『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』(貝塚茂樹・伊藤道治、一九五九年。一九八〇年増補訂正版は『甲骨文字研究』に改名)

などがある。

これらを前號小論で併記した理由は、『丙編』のように釋文や解説があつたり、拓本がより鮮明のものもあり、さらに考古學的發掘に

よる甲骨版は、出土坑もしくは出土地點が明確なものであり、また、考古學的發掘以外でも出土地點の推定できる甲骨片をふくむ著録もあり、くわえて、島邦男『殷虛卜辭類』(汲古書院、一九六七年、増訂再版一九七一年。略稱は『卜辭類』とする)が利用しやすくなるためである¹⁰⁾。

ちなみに、筆者が卜辭を學習し始めたのが一九七六年であるから、『合集』は當時なかった。テーマを農業關係卜辭に定め、史料収集に當たったが、甲骨學關係の著書や拓本集は稀覯本が多く、閲覽すると自體、難儀をともなった。このことから比較すると『合集』出版後の卜辭史料収集に對する努力は、天と地ほどの違いがあり、雲と泥の差がある。隨分、容易たやすくなったものである。ただ、『合集』以前に出版された著録には、それぞれがそれそれなりの出版事情や時代背景、あるいは主張があり、個性的でもあり、捨て難い側面がある。併記する所以のひとつである。

なお、ここに掲げた著録は、前號小論で扱ったもののみであるが、それまでに出版された著録で、『合集』に採用された著録名のすべては、『甲骨文集材料來源表』全三冊(胡厚宣主編、中國社會科學出版社、一九九九年、略稱は『材料來源表』とする)にみえる。

つまり、併記された甲骨著録にみえる卜辭と「合集」卜辭との照合は、『材料來源表』を使用すればよい。

また、甲骨著録に關する書誌として、劉一曼・郭振録・徐自強編著『北京圖書館藏)甲骨文書籍提要』(書目文獻出版社、一九八八年。略稱は『書籍提要』とする)がある。本書は、都合二三七件の甲骨關

係論著の概要を紹介する。甲骨文字資料ならびにそれらの考釋と研究論著が、解放前の五〇年間では執筆者三〇〇人、各種論著九〇〇種にちかく、解放以後の三〇年には執筆者一〇〇〇人にちかく、各種論著も四〇〇種以上にのぼる。これらのなかから主たる著作を、古代史研究者ならびに甲骨研究者のために全面的かつ系統的にとりあげ紹介したのがこの『書籍提要』である。『合集』に採用された著録の書誌情報は、これによって賄える。便利でありがたい。のちに、第五節で紹介する『百年甲骨學論著目』よりも詳細であり、利用價值は減じていないと思われる。

B、01卜辭の「英國一三三三||金四九六」について

このBの形は、「英國一三三三」と「金四九六」のいずれもが、この卜辭の典據である。「英國」の「一三三三」は拓片番號、「金」の「四九六」は模本番號を示す。

「英國一三三三」は『英國所藏甲骨集』(略稱は『英國』とする)が著録すなわち出典で、「一三三三」が、この拓片番號を指し、「正」は正反(表裏)の正(表面)の拓本という意味である。この典據と拓片番號から、この卜辭をふくむ拓片に當たることのできる(圖IV i)。「金四九六」は『金璋所藏甲骨卜辭』(以降、『金璋』と略稱する)が著録すなわち出典で、「一四」は模本番號を指し、この模本は『合集』の三九九一二片號にもそのまま収録されている(圖IV ii)。

兩者は同じ骨版からの拓本と模本である。現物の骨版は劍橋大學圖書館(Cambridge University Library)に所藏されている¹¹⁾。

「01」の卜辭例にみえるように、卜辭の出所については、『英國』と『金璋』の著録名を併記している。この『英國』との併記は、前號小論では、八〇條のうち、六條みえる。このうち、『金璋』との併記が三條、『庫方二氏藏甲骨卜辭』が三條ある。『金璋』ならびに『庫方二氏藏甲骨卜辭』に掲載されたのは、いずれも模本であるが、ともに『英國』には拓本として収録されている。

『英國』すなわち『英國所藏甲骨集』は、正確には『英國所藏甲骨集・上編』で上下二冊からなる拓本の圖版集である。李學勤・齊文心・艾蘭の編著で一九八五年に中華書局から出版された。書名どおり英國に所藏されている甲骨版（都合二六七四片）が掲載されている。また、一九九一年には下編の上下二冊が出版され、釋文がある。釋文のみならず既著録の模本・拓本との對照表、あるいは甲骨文字索引が附せられている。

C、21卜辭の「人文六九二」について

このCの形は、「人文」すなわち『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』（略稱は『人文』とする）所載の拓片番號六九二の卜辭という意味である（圖V）。この卜片は『合集』には採録されていない。『合集』には『合集』の採録基準が設定されており、この基準から外れた甲骨片は選録されていない。ただし、不採録の理由が不明で選録されていないものもみられる¹²⁾。

『人文』は、貝塚茂樹・伊藤道治の編著で、拓本の圖版篇（上下二冊、一九五九年）のみならず、本文篇（一九六〇年）があり、模本の付せ

られた甲骨片や釋文と解説がみえ、さらには索引篇（一九六八年）もある。初心者にとつても扱いやすい（圖V）。一九八〇年に増補訂正版が『甲骨文字研究』（全三冊）に改名され、同朋社から出ている。

D、43卜辭の「合集六二二二正+合補二二一九」について

このDの形は、「合集六二二二正」と「合補二二一九」を綴合したものとという意味で、「合補二二一九」は、『甲骨文合集補編』（略稱は『合補』とする）の圖版にみられる拓片番號二二一九を指す。

『合補』すなわち『甲骨文合集補編』は全七冊で、文字通り『合集』に遺漏した甲骨史料を補う。中國社會科學院歷史研究所（彭邦炯・謝濟・馬季凡）の編纂である。一九九九年に「甲骨學一百年成果之二」として、語文出版社から出版された。殷墟甲骨一三四五〇片、殷墟以外遺蹟出土甲骨三一六片が収録され、時代、區分などの分類は『合集』にほぼ準ずる。拓本圖版、釋文、資料來源表、綴合關係の表などが附せられている。ただし、『小屯南地甲骨』上冊（中華書局、一九八〇年）や『英國』、『甲骨續存補編』甲編（天津古籍出版社、一九九六年）などはふくまれない。

この「合集六二二二正」と「合補二二一九」の綴合は、蔡哲茂『甲骨綴合續集』（文津出版社、二〇〇四年）第三六六組による（圖VI）。ばらばらになった甲骨片の綴合には、随時、關連圖書に注意しておく心構えが必要となる。しかしながら、綴合作業は實物もしくは原拓を所藏する立場の仕事である、と割り切り、筆者が綴合を積極的に検討対象としたことはない。綴合についてはこのようにいささかルーズで

あることを白状しておく。ただ、甲骨片の綴合の方法は、現在、かなり高度なレベルにあるらしいことは承知している。

以上、引用卜辭がどのような著録に掲載され、どのような著書にこの釋文がみえるのかについて、前號小論を例として四タイプの著録引用例について紹介した。ここで取りあげた工具書の主たるものはつぎの通りである。

『甲骨文合集』全一三冊（中華書局、一九七八年～一九八三年）

『甲骨文合集材料來源表』全三冊（中國社會科學出版社、一九九九年）

『殷墟甲骨刻辭摹釋總集』全二冊（中華書局、一九八八年）

『甲骨文合集釋文』全四冊（中國社會科學出版社、一九九九年）

『英國所藏甲骨集』上編下編全四冊（中華書局、上篇一九八五年、下篇一九九一年）

『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』圖版篇上下二冊・本文篇・索引篇（京都大學人文科學研究所、圖版篇一九五九年、本文篇一九六〇年、索引篇一九六八年。増補訂正版『甲骨文字研究』圖版篇・本文篇・索引篇全三冊、同朋社、一九八〇年）

『甲骨文合集補編』〈甲骨學一百年成果之二〉全七冊（語文出版社、一九九九年）

（右以外に、大型著録（釋文などをふくむ）で、考古學的發掘によるものには、『小屯南地甲骨』上下全五冊（中國社會科學院考古研究所編、中華書局、一九八〇年・一九八三年）、『殷墟花園莊東地甲骨』全六冊（中國社會科學院考古研究所編、雲南人民出版社、二〇〇三年）などがある。）

四、重要語彙をふくむ卜辭史料収集と工具書

前節では、引用卜辭の確認のための基礎作業について述べた。これは必要な作業にはちがいないが、面倒で辛氣臭い仕事でもある。有り體にいうと「校正」レベルで、極めて受動的な作業である。

本節では、こうした受動的から能動的へ、すなわち批判のための作業へと方向を轉換してみたい。積極的批判のための卜辭史料収集をこころみることである。

ここでも、前號小論を例にとりたい。そこでのテーマは「帝」と「下上」というターンのであった。これら「帝」と「下上」を、假に重要語彙とする。こういう假定に立って、「帝」と「下上」に關連する卜辭史料収集について、工具書の使い方を中心に述べてみたい。

この場合、『合集』が出発点となりうる。

『合集』という書物は、すでに述べたように、甲骨片の拓本などを集大成したもので、有字甲骨の拓本・模本・寫眞など、都合四一九五六片を収める。

『合集』出版後、『摸釋總集』（一九八八年）ならびに『殷墟甲骨刻辭類纂』（一九八九年、略稱は『類纂』とする）の兩書が相次いで出版された。『摸釋總集』については、すでに述べたように『合集』所収の甲骨卜辭の模本と釋文を載せる。

とりわけ、本節に有用なのは、『類纂』である。

『類纂』すなわち『殷墟甲骨刻辭類纂』全三冊は、甲骨文字の一字索引である。姚孝遂主編で中華書局から一九八九年に出版された。甲

骨卜辭の出所、すなわち甲骨拓片の原著録には『甲骨文集』『小屯南地甲骨』『英國所藏甲骨集』『懷特氏等所藏甲骨文集』がある。これらの甲骨版にみられる卜辭を文字ごと、ターンごとに整理している。

『類纂』には部首(圖VII i)と「字形總表」(圖VII ii)が、まずあり、そして「本文」には卜辭例があげられ、各卜辭には『合集』番號・模本・釋文・時代區分が記される。

例とする「帝」字を部首と「字形總表」から、檢索してみよう。

「帝」は部首そのものに立てられている。部首「帝」の右下に「(字形總表) 九頁」(實際には八頁)とある。そこで「字形總表」の八頁を開くと、「帝」の文字番號¹¹³²が記されている。この四桁のアラビア數字の番號が貴重で、前號小論に引用した卜辭の隨所に、この甲骨文字番號を付している。

また「字形總表」の「帝」の文字番號¹¹³²の下の段には、四一八頁から四二五頁と指示されている。

『類纂』本文の四一八頁(圖VII iii)を捲ると「帝」をふくむ卜辭例がならぶ。そこには、まず「帝」の甲骨文字が掲げられる。「帝」は二つの字形が提示されている。つぎに「帝」をふくむ用語(ターン)や「文字の慣用的な結合のしかた」ごとに、卜辭がまとめられている。「帝」をふくむターンや重要な表現、具體的には「上帝」「帝令雨」「帝令雷」「帝・風」「帝・莫」「帝異」「帝・摧」「帝・囚」「帝疾」「帝終茲邑」「帝若」「帝受我祐」「帝尫」「帝臣」「方帝」「巫帝」「帝秋」「帝令」「帝于」「于帝」「其它」など、これら項目ごとに卜辭例がならぶ。

ならべられた卜辭は、いずれも、上から「番號」、「卜辭の模本」、「釋

文」、「時代區分」の順にみえる。

例えば、圖VII iiiの「帝令雨」の項目の、最初に掲げられている卜辭で解説したい。

「九〇〇正」とあるのが「番號」で、典據を示す。數字のみの場合、出典は『合集』である。したがって、「九〇〇正」とは、『合集』が出典で、「九〇〇」は『合集』の拓片番號をしめす。「正」は正反の正で、表裏の表の意味である。すなわち甲骨版の表面の拓本ということである。裏面の拓本のときは「反」とされる。

この卜辭は、『合集』の「九〇〇正」を出所とする、「帝令雨」というターンをふくむ卜辭が掲げられている、ということになる。

「九〇〇正」という卜辭番號の下に、卜辭の模本があり、そのまた下に釋文がみえる。この釋文は「自今庚子：于甲辰帝令雨」とあり、甲骨文字を現行の漢字もしくはこれに近い漢字に書き改められ、おおよその卜辭の意味が読みとれるものがおおい。この卜辭では、「今すなわち庚子の日より、：甲辰の日に帝は雨を降らしめるか」という意味になることが知られる。卜辭そのものではなく、釋文に注目すれば、中國學研究者であればおおよその内容が推測できるものもある。

釋文の下には1〜5のアラビア數字がしるされている。この數字は時代區分を示し、五期に時代區分されている。時代區分は「原著録」のそれに依據する。したがって、「九〇〇正」卜辭は、1とあるので第一期に屬す卜辭ということで、典據が『合集』であるから、その時代區分にしたがうものである¹¹³。

要するに、『類纂』を活用すれば、「帝」をふくむ卜辭例を見ること

ができる。つまり、筆者が引用した卜辭（八〇例）をふくめて、「帝」関係の、ほぼ全ての卜辭史料に目を通すことが可能となる。

なお、「上帝」というターンは、「帝」には項目としてのみあげられ、卜辭自体は三九六頁の「上（文字番號1116）」の項目に属している（圖VII iv）。この「上帝」の項には、三卜辭がならぶが、第一期と第二期と第三期に各々一卜辭のみである。

また、「下上」については、「上」につづく三九七頁の「下（文字番號1117）」の項目に属し、ここには「下上」をふくむ卜辭がならぶ（圖VII v）。

なお、『類纂』下冊には「筆畫檢索」や「拼音檢索」なども附され、釋文の定まった文字については、これらの檢索も利用できる。

ところで、この『類纂』の文字番號である四桁のアラビア數字については、さきに貴重と評價し、前號小論に引用した卜辭の隨所に、この甲骨文字番號を付したと述べた。このように述べたのは、この四桁の文字番號から、さらに甲骨文字の諸説を知るのにも利用できるからである。

この『類纂』の文字番號は、『甲骨文字詁林』の文字番號と同じに設定されている。『類纂』と『甲骨文字詁林』の文字番號が共通している、というわけである。

『甲骨文字詁林』全四冊（略稱は『詁林』とする）は、甲骨文字ごとに諸家の説を蝟集しており、于省吾主編で中華書局から一九九六年に出版された。

テーマである「帝」についての諸説に、當然『詁林』出版以前に出

された諸説にかぎられるが、ほぼ當たることができる。¹⁴たとえば、「帝」の文字番號は「1132」であったから、この文字番號を引くと、一〇八二頁（圖VIII i）以降に諸説がならぶ。

「帝」の文字番號「1132」の下に、「帝」と「禘」の二字の釋字が掲げられ、この下に甲骨文字の字形が四文字置かれている。この左に諸説がならぶ（圖VIII i）。順に孫詒讓、王襄、孫海波、嚴一萍、王輝、鍾柏生、張桂光、裘錫圭、高明と續き、最後に編者の按文が据えられている。引用諸説は著書や論文から關係箇所を抜粋して、いわば「切り貼り」したものである。非常に便利な工具書であるが、理想としては原文である著書や論文で確認できればまちがいがいい。

また、同類の、諸説「切り貼り」の元本ともいえるべき書物がある。李孝定の編述による『甲骨文字集釋』全八冊（中央研究院歷史語言研究所專刊之五十、一九六五年）である。¹⁵

どうように「帝」字を「本書索引」で引くと、畫數の九畫にみえ、卷一の二五頁とある（圖VIII ii）。そこには、「帝」の甲骨文字のさまざまな字體が著録名とともに掲げられ（『甲骨文編』『續甲骨文編』に據る¹⁶）、この左に諸説がみえる（圖VIII ii）。順に羅振玉、郭沫若、葉玉森、陳邦懷、胡厚宣、王襄、孫海波、陳邦福、李孝定（按文）、補足として陳夢家、そして再び李孝定（按文）、などのように諸説がならぶ。

『詁林』には『甲骨文字集釋』所收の諸説を省いている場合があり、方針というほど確かではないが、そうした側面がみられる。したがって、兩書の併用が望ましい。

以上、能動的批判作業として、重要語彙をふくむ卜辭史料収集と工具書について案内した。ここで取りあげた工具書の主たるものはつぎの通りである。

『殷墟甲骨刻辭類纂』全三冊（中華書局、一九八九年）

『甲骨文字詁林』全四冊（中華書局、一九九六年）

『甲骨文字集釋』全八冊（中央研究院歷史語言研究所、一九六五年）

（右以外に、島邦男『殷墟卜辭類纂』（汲古書院、一九六七年、増訂再版一九七一年）は、『刻辭類纂』がモデルとした一字索引で、甲骨文字の字形の偏旁（構成要素）を部首として立てられており、甲骨文字自體から直接卜辭例を集めることを可能とした工具書である。甲骨學史上、畫期的な業績であり金字塔といえる。前節で、『合集』と舊著録名を併記する理由で述べたように、『卜辭類纂』の利用價值は減じていない（註10参照）。各卜辭の捉え方に違いのあるものもあり、『刻辭類纂』の讀みと比較對照するのが理想と思われる。また、松丸道雄・高嶋謙一編『甲骨文字釋綜覽』（東京大學出版會、一九九四年）は、『甲骨文編』の文字排列にしたがい、各文字に相應する『殷墟卜辭類』の部首番號と新設した文字番號が併記されてある。本文は、左から「文編」「綜類」「甲骨文字」「字釋」「參考」「出典」について順に記されている。「文編」の欄には「甲骨文編」の文字番號がみえる。「綜類」の欄には『殷墟卜辭類』の部首番號と新設した文字番號が記される。「甲骨文字」の欄には、該當する甲骨文字の各種・異體字がみえる。「字釋」の欄には當該甲骨文字に對する諸説がみえる。「參考」の欄には「字釋」の要點などを記す。「出典」の欄には諸説の出所が記されている。

當該書附載の「文獻目錄」を検索して出典が知られる。諸説を全體的に見渡すのには便利であり、出典は分かるが、「説」そのものについては、その出所・出典に當たる必要がある。また利用には習熟する必要がある。）

五、おわりに―期待される工具書

一九九九年、甲骨文字發見から百年間の成果として、つぎの三著が出版された。

『甲骨學一百年』〈甲骨學一百年成果之一〉（社會科學文獻出版社、一九九九年）

一九九九年）

『甲骨文合集補編』〈甲骨學一百年成果之二〉全七冊（語文出版社、一九九九年）

一九九九年）

『百年甲骨學論著目』〈甲骨學一百年成果之三〉（語文出版社、一九九九年）

三つの成果のうち、成果之二の『合補』については、第三節ですでに紹介済みである。

成果之一としての『甲骨學一百年』は、中國甲骨學界の公式の見解であり、甲骨學の現在のレベルの披瀝と捉えるべきであろう。著者は王宇信、楊升南、孟世凱、宋鎮豪、常玉芝の五名である。（この書については本號の古文字學研究文獻提要を参照。）

また、成果之三としての『百年甲骨學論著目』は、百年間に發表された論文や出版された著書、一〇九四六件を收録する。宋鎮豪主編、宋鎮豪・常耀華編纂で、編年索引、作者索引、篇名索引があり至便で

あり、非常に有益な工具書である。

ついで、工具書というよりも「圖書館」ともいうべき『甲骨文献集成』(中國古文字大系)全四〇冊(四川大學出版社、二〇〇一年)が出版されている。文字通り甲骨學の文献の集大成である。主たる文献が影印されている。ただし甲骨片の拓本や模本だけの著録は収録されていない。

これらは、『合集』と『合集』関連圖書とともに、つぎの百年の礎ともなり、出發點でもある。

さらに、宋鎮豪主編『商代史』全一冊(中國社會科學出版社、二〇一〇年)が上梓され、現代の殷代史の學術水準の高さを示し、従來の文献史料のみならず地下から出土した文物や文字史料、とりわけ考古學的に發掘された遺蹟や文物がふんだんに使用されている。

このような中國の甲骨學や殷代史の學問的成果が、ここ十數年に集大成的に出されたことは慶賀の至りにちがいない。

ただ、補足すべき點があるすれば、引用されている卜辭史料の用いられ方であろう、と筆者は感じる。卜辭内容のみが重視されすぎてい、と考えるのである。

卜辭内容のみを重視するのは、従來からの卜辭の用い方で、これまでの狀況がそのようであった、ということかも知れない。

しかし、こうした卜辭の扱い方は改善されるべきであろう。前號小論で、卜辭をあつかうのに、甲骨版の材質の相違や出土坑(地點)を重視したのは、従來の扱い方に一つの反省を加えたためである。

要するに、文字を刻んだ甲骨片の材質の相違、甲骨片の出土坑(地點)、占いに供された甲骨版の貢納者(奉納者)と貢納(奉納)を受けた署名者などについての報告書などもみられ、そして字體研究もかなりの進展がある。こうした卜辭をめぐる情報は、甲骨版ごと、あるいは卜辭ごとに提供されるべきであろう。

一卜辭の字體グループの所屬¹⁷⁾、甲骨版の材質、出土坑(地點)、甲骨版の貢納者(奉納者)と貢納(奉納)を受けた署名者などの研究や情報は、それぞれ單獨もしくは散在的に提供されている¹⁸⁾。これらを総合した形で工具書としてまとめる作業、あるいはデータベースとする作業が残されている、というのが現在の段階であろう。こうした理想的な工具書やデータベースができれば、改めて卜辭による「史實」が、檢證もしくは確證され、また確認されるはずである。

註

- (1) 筆者の體驗では、小著『殷代氣象卜辭の研究』(京都・玄文社、一九九一年)に對する、研究者の少ない學問分野である古氣候學の觀點からの鈴木秀夫氏のご意見などは貴重なものに感ぜられた。鈴木秀夫『氣候變化と人間』九九―一〇〇頁(大明堂、二〇〇〇年)參照。
- (2) 「甲骨學」は一つの學問分野である。中國古代の遺蹟から出土した、占いに用いられた文字の刻まれた龜甲・獸骨(有字甲骨)を研究對象とする。主たる有字甲骨は殷墟出土の遺物であるが、近年西周遺蹟からも出土し、これらも含む。出土有字甲骨は、一八九九年の發見から今日まで十五萬片前後を數える(王宇信『甲骨學通論』一頁、中國社會科學出版社、一九八九年)。「甲骨學」という言葉は、一九三一年に周豫同が使用して以來、常用されるようになった(『甲骨學一百年』一六頁)。甲骨學の歴史について、王宇信氏は「甲骨學的『先史』時期」「甲骨文的非科學發掘階段和甲骨學的草創時期(一八九九―一九二八年)」「甲骨文的科學發掘階段和甲骨學的發展時期(一九二八―一九三七年)」「甲骨學的深入時期(一九四九

年(現在)」に分期する(前掲『甲骨學通論』六五―一〇二頁)。現在では語言文字學・歴史學・考古學・宗教學・古代科學技術史研究と密接に関連するものとなっている(前掲『甲骨學通論』一―二二頁)。また、孟世凱『甲骨學辭典』(上海人民出版社、二〇〇九年)の「甲骨學」の項目には「學科名」として「歴史學、考古學和古文字的重要分支學科」とみえ、張凱之主編『中國近代史學學術史』(中國社會科學出版社、一九九六年)五一―四頁には「歴史考古學」の範疇に屬し「中國考古學的一門分支學科」とする。

(3) 本誌「古文字學研究文獻提要」欄(前號ならびに本號)に、古文字學についての入門書が紹介されている。

(4) 日本甲骨學會の成立については、山田勝美「甲骨學會成立の経緯」(『甲骨學』第一號、一九五一年)にくわしい。日本甲骨學會成立に東奔西走し盡力したのは、水澤利忠氏とされている。一九五〇(昭和二五)年十一月二二日に第一回目の研究會がもたれ、顧問として加藤常賢・貝塚茂樹兩氏を迎えている。「日本甲骨學會規約」も作られ、設立目的として「甲骨文、金文に據る中國上代文化の究明を目的とする」とされ(『甲骨學』第一號末尾付載)、幹事が「關東」「關西」「西日本」「北日本」に數名ずつ配されている(『甲骨學』第二號末尾付載)。機關誌『甲骨學』の創刊は一九五一年(昭和二六)年十月、創刊號から第十二號(一九八〇年)まで發行され、とりわけ、一九六四年(第十號)までの一〇冊は、合冊され上下本として一九七二年に再刊されている。この間(ほぼ三〇年間)『甲骨學』所載の内容には、甲骨資料の収集、甲骨關係論者の紹介と批評、研究論文や翻譯などがある。とりわけ、甲骨文字の時代區分問題では、五期區分が基本的に認められたうえで、島邦男氏が第四期(帝乙・帝辛時代)とする卜辭に對して、貝塚茂樹・伊藤道治兩氏は第一期晩期に屬する、いわゆる王族卜辭・多子族卜辭とした。この島説と貝塚・伊藤説との對時は、董作賓説と陳夢家説との對時に内容的にはほぼ同じく、日本でも中國側研究者と共通の問題意識をもっていった。むしろ、研究の緻密さなどからは、凌駕もしくは匹敵する研究レベルにあったといえる。この機關誌のことを、後述する甲骨學の泰斗・董作賓は「我看日本人已有『甲骨學會』而中國人還沒有、自己感覺到非常慚愧」と記している(『中日文化論集』一九五五年)。このように、一九五〇年代から活發であり、甲骨學の泰斗を感嘆せしめた日本の甲骨學が、現在においてはその研究者も寥々たるものとなってしまった。現在の甲骨學の現狀については、本誌第一號(二〇一三年發行)所載の「二〇一一年古文字學論著目(佐藤信弥氏收集)」に歴然としている。日文書の「甲骨文」(單行本)には一件、同論考には二件掲げられるのみであり、しかも甲骨學專論もしくは甲骨學研究書というべき性格ではないらしい著

述がほとんどである。これに對して、中文書の「甲骨文」(單行本)には一七件(このうちの一件は日本人の著書である)、同論考には八一件掲げられている。日本の甲骨學界の貧困といえる。

(5) 孟世凱のプロフィールは『甲骨學辭典』の著者紹介による。

(6) 徐中舒(一八九八―一九九一年)は、安徽省懷寧縣(現在の安慶市)生まれ、一九二五年立達學會設立(於上海)メンバーの一人。同年、精華大學研究院に入り、王國維(一八七七―一九二七年)・梁啓超(一八七三―一九二九年)・趙元任の教えを受け、のち上海復旦大學・暨南大學の教授となり、一九二九年、中央研究院歷史語言研究所編纂員(副研究員に相當)一九三〇年史語言研究所專任研究員、一九三三年、容庚とともに「考古學社」(金石學會)設立、一九三八年四川大學教授となり、中國先秦史研究會理事長、四川省歷史學會會長、四川省博物館館長、中國古文字研究會理事など歴任。『先秦史論稿』(巴蜀書社、一九九二年)が死後出版された。

(7) 『合集』の方が鮮明な場合もある。『合集』が拓本を選録する場合、元本よりも鮮明で完全な拓本がある場合には、これを用いている。『甲骨文合集材料來源表(上編)』(後出)には、いわゆる「選定號」として記されている。

(8) 出土地點の明確なものには、『小屯・殷虛文字甲編』、『小屯・殷虛文字乙編』があり、また『丙編』は『小屯・殷虛文字乙編』のYH一二七坑出土の龜版を綴合したものである。

(9) 董作賓「甲骨文斷代研究例」(一九三三年、『中央研究院歷史語言研究所集刊外編―慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』)の「四、坑位」によれば、羅振玉編纂にかかる『殷虛書契前編』、『殷虛書契後編』、『殷虛書契菁華』などに掲載の甲骨片の出土地は「第一區」であり、劉鶚編纂にかかる『鐵雲藏龜』は「第二區」から出土したとする。

(10) たとえば、前號小論に引用した64「甲午卜敵286貞、沚084畝22：从、下辭綜類」にしたがって、「合集三九五八〇存一・六八七」卜辭については、島邦男『卜辭類纂』(後出)は「甲午卜敵286貞、沚084畝22」を別卜辭とする。このように一卜辭とするか二卜辭とするかの問題や甲骨文字の讀み取りの相違などに比較し利用できる。

(11) 『英國』下編下冊・表一の「英國一三三」の項にみえる。

(12) 末次信行『甲骨文合集』の「材料來源」について(『金蘭短期大學研究誌』第三一號、二〇〇〇年)参照。

(13) 『類纂』編者は、『合集』の時代區分に準じる形をとっている。しかしながら、『類纂』の序では第四期と『合集』で時代區分される歴組について、

第一期および二期は第二期との立場をとるとの表明だけはしている。

(14) なお「下上」は、一字ではないために『話林』に親字としては採用されていない。『百年甲骨學論著目』(後出)などの書目から関連論著を探し出すほかない。

(15) 『甲骨文字集釋』の内容は、本文一四巻で、補遺・存疑・待考が附せられている。索引には「本書索引」「本書所收諸家異說索引」「存疑索引」の三種があり、それぞれ巻数順で引くことができる。なお冊数には全八冊のものあり、全七冊のものあり、全一六冊のものもある。

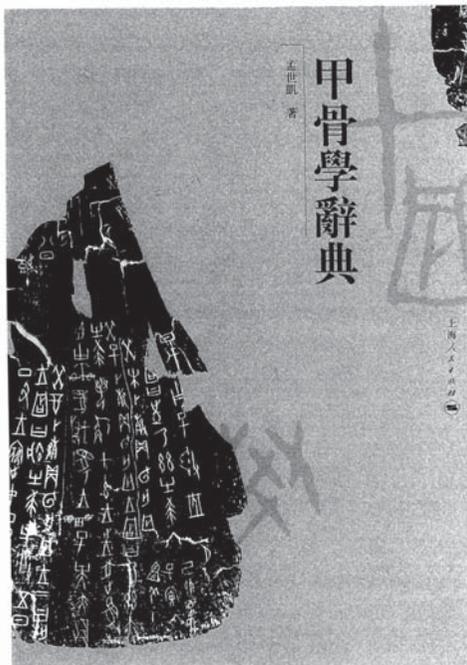
(16) 孫海波『甲骨文編』(一九三四年)、金祥恆『續甲骨文編』(一九五九年)はいずれも甲骨文字の諸字體を模録し、『說文』の部首順を踏襲し排列したものである。

(17) 『合集』所録甲骨拓片の字體區分について、楊郁彦『甲骨文合集分組分類總表』(藝文印書館、二〇〇五年)は、『合集』全片を分類對象とし、第四期とされている、いわゆる歴組の時代區分を第一・二期とするのが特色である。また、崎川隆『賓組甲骨文分類研究』(上海人民出版社、二〇一一年)は、『合集』のうち賓組のみを分類對象とする。

(18) 材質の相違と貢納者あるいは出土坑(地點)などについては、前號小論の註8に詳説している。

附記…冒頭でも述べたように、拙稿の主たる目的は「良心的研究者」が甲骨學論文や著書を読み、さらには批判するために、工具書と使用法を案内することであった。したがって、工具書を網羅的に、漏れ無く取りあげたものではない。また、本来の初心者向けに書いたものでもない。本来の初心者には、甲骨版の良質の寫真なり精緻な拓本なりを提供すべきであろう。美しい寫真や拓本から、甲骨文字の大きさや小ささ、形のおもしろさをよくよく味わい、卜辭内容の豊富さに學問的關心をいだく、ということを目的する案内書が適切であろう。卜辭に魅力を感じたうえで、一定の時間をかけることを惜しまない、という覺悟と物心いづれかの餘裕とに裏打ちされた心境で取り掛かるのが最良である。しかし、卜辭から當時の社會なり眞實なりを追究しようとする者は、この日本の御時世では「絶滅危懼種」に屬すであろうが、こうした「絶滅危懼種」のための甲骨學入門あるいは甲骨學案内が望まれる狀況の生まれることを期待したい。

(立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所漢字學研究會會員)



𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 或釋庚。地名。康辛、康丁時期卜辭有：“庚午卜，貞：王其田𠩺……”又：“王其田𠩺(湄日)無災。”又：“王申卜，王命介以疾，立于𠩺。”又：“其田𠩺，湄日無災。”(《合》28577,《英》2302,《屯》341, 3759)當為商王朝之田獵地。今地待考。

帝 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 ①天帝，天神。《易·益》：“王用享於帝吉。”王弼注：“帝者，生物之主，興益之宗。”孔穎達疏：“帝，天也。”(《字彙·巾部》：“帝，上帝，天之神也。”卜辭中所見帝主宰風雨雷萬(旱)和人間禍。武丁時期卜辭有：“貞：帝其作我孽。”又：“貞：帝不我受佑。”又：“辛丑卜，般貞：帝若王，二告。貞：帝弗若王，二告。”又：“壬寅卜，般貞：帝弗佐王。”(《合》14184, 14190, 14191, 14198 正,《英》1136)武乙、文丁時期卜辭有：“……來歲帝其降永，在祖乙宗，十月卜……帝不降永。”(《屯》723)②商先王尊號。見“帝丁”、“帝甲”、“帝乙”、“帝辛”、“文武帝”等。③祭名。即禘。《說文》：“禘，諦祭也。从示，帝聲。”《詩·商頌·長發序》：“長發，大禘也。”鄭玄箋：“大禘，郊祭天也。《禮記》曰：‘王者禘其祖之所自出，以其祖配之是謂也。’王云，殷祭也。”武丁及後期卜辭有：“貞：禘于癸。勿禘于癸。”又：“丁未卜，王禘于癸。”又：“戊戌卜……禘黃爽，三犬。禘黃爽，三犬。”又：“己巳卜，貞：禘于西。貞：勿禘于西。”又：“甲辰卜，禘于東，九月。”又：“戊寅卜，九犬，禘于西，二月。”(《合》368, 1140, 3506, 14328, 21084, 21089)武乙、文丁時期卜辭有：“乙酉卜，禘，伐自上甲。”又：“癸亥，禘。癸亥卜，禘北。癸亥卜，帝南。癸亥卜，禘西。”(《合》32063, 34154)

帝乙 商王。甲骨文中不見帝乙尊號。商器《却其銘》銘文稱爲“文武帝乙”。《史記·殷本紀》：“帝太丁崩，子帝乙立，殷益衰。帝乙長子曰微子啓，啓母賤，不得嗣。少子辛，辛母正后，辛爲嗣。帝乙崩，子辛立，是爲帝辛，天下謂之紂。”司馬遷誤帝乙父文丁爲“太丁”。帝乙、帝辛時期有三十餘條征人方卜辭。故帝乙、帝辛父子兩代仍致力於伐東夷而向東南擴展勢力。

帝丁 𠩺 𠩺 𠩺 商先王尊稱。不同時期卜辭中所稱不同之先王。祖庚、祖甲時期卜辭有：“甲戌卜，王曰：……父丁……佑……甲戌卜，王

普。自上甲至下乙。”(《合》6947 正, 419 正)胡厚宣謂：“下乙者，既非小乙、大乙、乙，則必爲祖乙。”(《卜辭下乙說》，刊《北京大學四十周年紀念論文集》，1940年)姚孝遂謂：“下乙，即小乙，爲武丁之父，亦稱入乙。”(《甲骨文字詁林》3533頁)

下人朋 𠩺 𠩺 地名。武乙、文丁時期卜辭有：“甲子貞：于下人朋墾田。甲子貞：于……方墾田。”(《合》33211)今地待考。

下上 𠩺 𠩺 𠩺 (合文) 下指地祇人鬼，上指上帝天神。“下上”爲地祇天神之省稱。武丁時期卜辭有：“貞：不惟下上肇王疾，二告。”(《合》14222 甲正)康辛、康丁時期卜辭有：“癸亥卜，彭貞：其酒，多王，下上無尤。”(《合》27107)

下上弗若 𠩺 𠩺 𠩺 (下上爲合文) 卜辭成語。目前大多見於武丁卜辭中。下，指地祇人鬼。上，指上帝天神。若，意爲和順。如武丁時期卜辭有：“癸丑卜，般貞：勿惟王征百方，下上弗若，不我其受祐。”(《合》6317)“弗”爲否定詞。參見“下上若”。

下上若 𠩺 𠩺 𠩺 (下上爲合文) 卜辭成語。目前只見於武丁時期卜辭中。下，指地祇人鬼。上，指上帝天神。若，意爲和順。如：“己卯卜，般貞：有奏德，下上若。己卯卜。般貞：有奏德，下上弗若。二告。”又：“……稱册，王从，下上若，受我祐。”(《合》7239 正, 7428)參見“下上”。

下示 𠩺 𠩺 𠩺 商王神主合稱。示即神主之象形。主要見於武乙、文丁時期卜辭，如：“丁未貞：其大御，王自上甲盟，用白豕九，下示汎牛，在父丁宗卜。”又：“己亥貞：卯于大(示)，其十牢，下示五牢，小示三牢。庚子貞：伐，卯于大示五牢，下示三牢。”(《合》32330,《屯》1115)陳夢家認爲：“下示當指小示。”(《殷墟卜辭綜述》467頁)姚孝遂、肖丁認爲：下示是指大乙至仲丁“六示，這些都是直系先王”。(《小屯南地甲骨考釋》26頁)吳福林認爲：下示，“應當是晚近先王的集合稱謂”。(《古文字分類考釋論稿》，刊《古文字研究》17輯)

圖 I (出所：『甲骨學辭典』カバー表紙・60頁・419頁)

<p>【解字】 卜辭史一，見卷三史部史字說解。</p> <p>【釋義】 字形結構不明，說文亦所無。</p> <p>【釋義】 義不明。</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p>	<p>【解字】 卜辭史一，見卷三史部史字說解。</p> <p>【釋義】 義不明。</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p>	<p>【解字】 卜辭史一，見卷三史部史字說解。</p> <p>【釋義】 義不明。</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p>	<p>【解字】 卜辭史一，見卷三史部史字說解。</p> <p>【釋義】 義不明。</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p>
--	--	--	--

<p>【解字】 卜辭史一，見卷三史部史字說解。</p> <p>【釋義】 義不明。</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p>			
--	--	--	--

專

一九八八年 成都
四川辭書出版社
JIAGU WENZI DIAN

徐中舒 主編

帝

<p>【解字】 卜辭史一，見卷三史部史字說解。</p> <p>【釋義】 義不明。</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p> <p>一、期前二一五〇 二、期前二一六一</p>			
--	--	--	--

圖 II (出所:『甲骨文字典』表紙・5~6頁〈上〉・7頁〈帝〉)

丙寅卜由馬小(四)？ (續 1156)
乎多馬經商便？ (四編 83)

圖版壹零伍 一一三 (圖版壹零肆一一二之反面 填墨)

釋文

- (1) 由子爻乙？L
- (2) 由子母庚？L
- (3) 勿由母庚？L
- (4) 蓋來二。

考證

此版係由三片碎甲綴合而成其原狀如下：

- (A) 乙組 1195 之反面(原無拓本)
- (B) 乙組圖版捌叁 6739
- (C) 乙組圖版壹壹貳壹 8335

爻乙即爻丁之爻小乙母庚即小乙之配姬庚。

圖版壹零陸 一一四 (Y H 127 填墨 爻丁)

釋文

- (1) 甲申卜，(庚)貞： 往(爻)乙(降)雷？」 一一
- (2) (甲)〔申〕卜，(庚)貞： (不)往(爻)乙(降)雷？L 一一
- (3) 乙酉卜，(庚)貞： 往爻乙降雷？」 一上吉二三
- (4) 貞： 不往爻乙降雷？」 一一
- (5) 辛亥卜，(王)貞： 雷爻乙百寧？十一月。 一一三
- (6) 戊午卜，(庚)貞： 雷王自往往？十二月。 一上吉二三上吉
- (7) 甲辰卜，(庚)貞： 我伐馬方帝受我又？一月。 一一三四
- (8) 貞： 由子上里三寧告我報雷？」 一一
- (9) 貞： 一寧平上甲告我報雷？」 一一

圖 iii (出所：『小屯·殷虛文字丙編』 165 ~ 166 頁〈丙編 114 釋文·考證〉)



圖 IV ii

(出所：『甲骨文合集』 4976 頁〈合集 39912 模本〉)

- (10) 十社于上甲？L
- (11) 由子示壬？L 一
- (12) 由不(不)便？」 上吉

考證

此版係由乙組中的三片碎甲綴合而成其原狀如下：

- (A) 乙組圖版柒貳肆 5408 13.0.12005
- (B) 乙組圖版伍伍叁 5713 13.0.12470
- (C) 乙組圖版柒伍肆 5728 13.0.12494

圖版中所填的墨除了極少數幾字而外全部都已褪色。

這一版上所見相連的月名有三：“十一月”“十二月”“一月”；所見的干支日名有五：“甲申”“乙酉”“辛亥”“戊午”“甲辰”其中“辛亥”在“十一月”，“戊午”在“十二月”，“甲辰”在“一月”，而“甲申”“乙酉”之下不記月名，從卜辭的內容來推測，這兩個日子俱可能在十月底或十一月初即爻乙以百寧，可謂盛典。

勝在此版乃地名，魯秋宣六年左傳：“圍郟及郟丘”，水經注引魏略外傳曰：“武王伐紂，郟丘更名曰郟”，一說：“平寧故城在魏縣東，即古郟丘也”，郟丘疑即卜辭之勝，在今河南滎陽東二十里。勝地的首領，則為子勝，例如：

- 丁巳卜，(貞)： 子勝其出災？ (續 740.1)
- 庚戌卜，(貞)： 子勝？ (續 740.1)

或單稱勝，例如：

- 由子不乎勝？ (四編 3)
- 弗其乎勝？
- 勝弗乎？ (四編 2955)

示壬即武，殷本紀：“報西卒子壬立”的壬，惟史記以壬示為報西之子，報西為報丁之子，則與卜辭的報西報丁示壬示癸世次不合。(此王國維說見殷虛書契卷九第 133 圖版下附報字報字報字報字)

圖版壹零柒 一一五 (圖版壹零陸一一四之反面 填墨)

釋文

- (1) 貞： 龜亡田？」

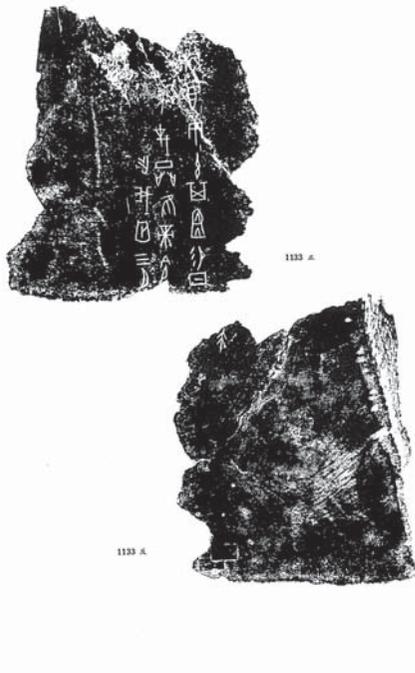


圖 IV i

(出所：『英國所藏甲骨集·上編』 231 頁〈英 1133 拓本〉)

